

幕末の弘前藩における痘瘡流行と牛痘種痘普及の実態

—豪商金木屋又三郎日記による研究—

松 木 明 知

一、はじめに

著者は昭和三十八年（一九六三）以来、津軽地方の疫癘史研究の一端として牛痘種痘法の歴史を研究してきた。⁽¹⁾⁽²⁾ その結果津軽地方はシベリアで牛痘種痘法を学んだ中川五郎治が伝えた所謂北方系の牛痘種痘法と長崎経由で伝えられた所謂南方系の牛痘種痘法の交流地の一つであり、この意味で日本の医学史上特異的な地域であることが判明した。

他地方と同様に痘瘡の頻繁な猖獗に悩んだにも拘らず、弘前藩は当初は何故か牛痘種痘法の受容については積極的態度を取ることとはせず、傍観者の態度をとった。この間の事情を著者は主として弘前藩日記を史料として研究してきたが、⁽³⁾ 弘前藩日記は公の立場の記録であり、種痘を受けた町民側が牛痘種痘法に対してどのような態度を取ったのか、また牛痘種痘の実際はどのようなものであったかなどの詳細な点については皆目不詳であった。信拠すべき町民側の史料が全く利用出来なかつたからである。

最近弘前の幕末の豪商金木屋又三郎の日記が弘前市立図書館の所有するところとなり、その全文の解説が終了した。著者は、主として解説の業務に当たられた弘前古文書解説会会長の花田要一氏から格別の御配慮を頂き史料の提供を受

けたので、これを史料として特に弘前を中心とする津軽地方の幕末期の痘瘡の流行と牛痘種痘の実態について解明を試みたので報告する。

二、金木屋武田又三郎日記について

武田又三郎は弘前の豪商山一（八）金木屋の第三代目である。享和元年（二八〇一）に生れ、慶応二年（一八六六）に歿した。初めは正三郎と称し、諱は敬之であり、山一は屋号である。父の又三郎玉之は有名な津軽の俳人である。玉之は寛政四年（一七九二）秋田久保田から父祖の地弘前に帰り、本町（現在の弘前市本町）で質屋を営んで分限を築き、弘前藩の御用達を勤めるまでに至った。しかし次の敬之の代になると、とくに天保年間の天候不順による凶作に加えて、度重なる藩からの御用金の要請や家業の衰退のため、敬之は本町の質店を大阪商人の茨木次右衛門へ売却し、文化二年（一八〇五）から賀田（よした）村（現在の中津軽郡岩木町賀田）で営んでいた酒造店の経営に専念することになった。天保六年（一八三五）から八年（一八三七）にかけてのことであった。山一が文政年間の「津軽長者鑑」では西の大関に位置していたが、天保年間以降の長者番付では西前頭九枚目に下っていることでも、右の事情は十分に首肯されるであろう。

今回史料として用いたのは、敬之が賀田村に移った天保八年（一八三七）から元治元年（二八六四）までの約二十五年間の日記二十冊である。天保八年（一八三七）～十三年（二八四二）一冊、嘉永六年（二八五三）二冊、安政元年（二八五四）～六年（一八五九）十二冊、万延元年（二八六〇）二冊、文久元年（一八六一）～元治元年（二八六四）三冊である。

木魚庵と号し俳句を良くした父の又三郎玉之の影響を受けて、敬之も筆忠実であり、日記の分量は四〇〇字の原稿用紙で五千枚余である。一族が広く津軽一円で商人として活躍しているため、津軽各地の町民側から見た人々の実際の動静を知るためには格好の史料と言える。商人の日記であるため、もちろん伝聞も多く、中には誤った情報も含まれていることは当然考慮しなければならないが、敬之は藩医との交際も頻繁であり、一族郎党の疾病の記述に関する限り誤り

のないものと考えられる。最近この日記の史料的価値が認識され、その一部が抄出され出版された⁽⁸⁾。しかし抄出であるため医学上重要な箇所が必ずしもすべて活字化されていなのは残念である。

当地方の医学史を研究する上でも本日記が重要な史料であることは、本日記中に見られる安政年度のコレラの流行に關する記述によつても実証されるであらう。

従来日本に於ける第二次のコレラ流行として知られる安政年度の大流行に關しては、北海道の函館地方にも伝播したと伝えられ⁽⁹⁾、最近の医学史の著作でもそのように主張されている。著者は青森県の西津軽郡深浦町近くの種里村の神官の日記「永宝日記」⁽¹²⁾および深浦町の実地調査によつて、この時の流行の北限としてコレラは函館までは及んでおらず、日本海側では青森県の深浦町までそれが及んだことを立証した。現在のところ次に示すように右の「永宝日記」が日本海側の安政年度のコレラ流行の北限に關する唯一の史料であつた。

安政六年八月 秋田能代に而暴瀉病人多死明家有之の由、深浦迄流行右に付、於当社八月二十八日より朔日迄右退散之祈禱執行

このように「永宝日記」は極めて簡単な記述であるが、一方金木屋又三郎日記の安政六年(二八五九)八月十九日から九月六日の条は次のように青森県深浦町でのコレラ流行を詳細に伝えている。なお訓読点は著者による。()は筆者による補ないし注である。

安政六年八月十九日

深浦にて頃日暴瀉病流行致し、死去の者多く有候由。右は若州古川船中にて人死に、右深浦へ上ヶ葬ひ候由。其日より流行致し候由。尤も手足の指先より入り候由。手足を結、指先より血を取り候者助かり候由。中略。尤上わ町は今に不流行。浜町ばかりの由。依て上(う)わ町へ上げぬとて、祈禱百万遍抔致居候。段々流行仕り来たり候所、伝染致

候事の由。親類縁者にても見舞に参り申さず候。

八月二十四日

深浦暴瀉ころり病いよゝ流行。船より病人上げ候日より流行致候由。跡に二人死骸有り候へ共、上げられず。右船鰯ヶ沢へ廻り候処、船中に塩漬けに致し置き候など風評にて、今に鰯ヶ沢流行も致すまじく候へ共、人々恐れ候。

右疫神赤き物を嫌い候よし。指先より入り候に付き、赤きつぎ(継ぎ)或は赤い糸にて、指先を結わえ右を除れ候よし。赤き腹当て致し候者も有り候よし。国より参居候奉公人杯、右を恐れ逃参り候有り候由。出入りの喜兵衛喜兵衛悴子悴子之。菊屋に奉公致し居候処、昨日逃げ参り咄の由。

九月朔日

弘前にて暴瀉病の呪い、門口へ八ツ手の木の葉へ、赤紙八つ折、なんば共提げ置き候よし。昨年江戸表病除きに下げ候よし。

深浦は専ら流行、明き屋も出候よし。鰯ヶ沢にも入り候風評許有れども、嘘のよし。野代(秋田県能代市)にて流行のところ、町端口々へ鉄砲打ち候へば宜しく候よしにて、大に数砲打ち候処、入り申さず候よし。鉄砲は陽気面白き呪い除けなり。

九月六日

暴瀉は深浦にて拾人ばかり死去仕り候へ共、此節さっぱりなく相成り候由。爰元にては一切御座なく候間、御家事下さるまじく存じ候。(鰯ヶ沢の知人よりの手紙の写し)

八月十九日の記述は敬之の知人が直接深浦から齎らした情報であり、信拠するに価する。これによって従来の史料では知られる所のなかつた事実、つまり安政年度のコレラ流行が若狭の船から伝播されたことを伝え、深浦では海岸寄り

の町で流行したが、山側の町までは浸透せず、人々が恐怖に戦いて、種々の呪いを行っている様子を実に物語っている。八月二十四日、九月一日の条は能代での流行を伝えてるが、鱒ヶ沢では流行していないことを証している。

さらに九月六日の記事は鱒ヶ沢在住の友人からの手紙であり、この記事によって九月初旬には深浦でのコレラの流行が終熄し、鱒ヶ沢ではコレラが流行しなかったことが実証されるのである。このように本日記の記述は従来推察されてきたことを実証補完するものであり、史料として十分信拠するに足りるものと考えられる。

三、金木屋又三郎日記に現れた痘瘡流行および牛痘種痘の記事

本日記に見い出される医事関係の記事は多い。敬之は近習医小山内玄益、同北岡太淳、表医者手塚元端、唐牛昌運などの藩医とも頻繁に交際しており、従って一族の病氣や弘前を中心とする地域の疫病流行についての記事も多いが、ここでは痘瘡流行および種痘関係の必要最小限の条文を年代順に抄出するに留める。痘瘡や種痘に直接関係のない前後の文章は省略する。句読点は著者により、() は著者による注である。

嘉永六年(一八五三)二月十一日

近年痘瘡前度の様之無之、五六年以前より不引切流行居申候。江戸表同様也。前度は六七年間を取り、乃至は五六年間を取流行出申候。

此頃は鱒ヶ沢(西津軽郡鱒ヶ沢町)一般と流行の由。弘前にも其爰に有、当村にても其爰有之候。兎角寒時は不面白候。一昨年痘瘡あらき方に有之候。木作(きずくり。西津軽郡木造町)へ秋田より参居候医者植痘瘡致居候。右致候者も有之候よし。拾年位前方唐土より伝わり上方江戸などにも有之候。然共御当国は今に左程用ひ不申。是も名医ならば格別、生ま習の医者等にては覚束なし。再び出候者も有之候由、右之所より余り流行不致候。

○同年三月二三日

此節に到り植痘瘡弘前大分流行致来候よし。茂森唐牛昌三老（藩医）の跡など致候よし。

○同年五月五日

弘前痘瘡最中流行也。植痘瘡唐牛の二男下手にて評判悪し。此頃の痘瘡軽く有之由。

○同年五月六日

金木屋（分家）痘瘡病良七伴並娘、亀吉嫁兩人共輕相濟申候。

嘉永七年（安政元年 一八五四）六月七日

此辺痘瘡そここに有り。近年は昔と違ひ毎年有り。前度は六七年にして流行す。近来は江戸同様也。

○嘉永七年（安政元年、一八五四）十一月二十一日

大道寺（家老大道寺族之助）若様当十一才、御三男、御四男様共頃日御痘瘡の由。

○安政二年（一八五五）十二月二十一日

弘前今に痘瘡頃日大に流行。図書様（家老津輕図書）にても、御三人ある女様一人御死去成され候由、小山内様（藩医

小山内玄益）の娘にも此節痘瘡の由。

○安政三年（一八五六）正月二十一日

金木屋お里う（又三郎七女タケの子）痘瘡にて今日より出初め、能き痘瘡のよし。出ざる前ほとりの節、驚風の様になり、大に心配致候由。左候へは、却て痘瘡宜しき物也。

○安政三年（一八五六）正月二十六日

金木屋疱瘡病み下痢致し、山上がり申さず。班も少々出交り候由。少々六ヶ敷方之由。愛宕橋雲寺へ御祈禱に金助参る。

○安政三年（一八五六）二月十一日

当年疱瘡あらく死亡多くあり候よし。

○安政三年（一八五六）二月十日

金木屋良七（親類）二男助七疱瘡の処、今日酒湯の日限にて昨夜病死致候旨、今朝知せ来る。

○安政三年（一八五六）十一月十一日

春（又三郎の孫）疱瘡初熱前発驚致し候。生きなり成り、大に心配致し候。中略。夫より熱気さめ出痘に相成り。誠に良き症にて、顔より総身漸く五十ばかりより出申さず。

○安政三年（一八五六）十一月十九日

丸三娘みえ（親類）当月九日より痘瘡の由。厚く出候へ共、症宜く、山も大に上り候由申参る。金木二（親類）にて啞々の悴共、当春やら種痘瘡致候所、並此方孫忠助（又三郎の五女タキの夫池田忠助入、鯀ヶ沢住）悴共、鯀ヶ沢中大体病み、両隣家迄も病み候へ共、此度もやみ申さず候よし。尤痘瘡あらく、怪我あり候へ共、種痘致し候だけ、安心の旨忠助咄居申候。

○安政三年（一八五六）十二月九日

丸三（親類）疱瘡病み、みゑ大にあばたに相成り候よし。潤吉も多く出候よし。小兒猛四郎は少々ならで出申さず候由申参る。

○安政四年（一八五七）二月十九日

種痘大分流行。昨年注文致し候由。此節種下たり候由。金木（親類）にて小兒等今日種痘御頼も申上げ候由。尤、茂森（弘前市茂森町）唐牛昌三老（藩医）の弟（弟でなく、次男唐牛昌孝のことであろう）とかの由。右種痘金木（親類）にて世話致し、近三（友人）頼合申遣し候よし。江戸にて専ら流行。深川の医者種方上手、其方より種下し候よし。江戸にて種二千七八百も諸方へ差出し候よし。大阪にては除痘瘡（緒方洪庵の除痘館か）と号し有り候よし。専ら行われ候よし。中略。本丁（現在の弘前市本町）大津屋九左エ門方の小兒残らず一昨年やら植え候よし。夫より近処痘瘡やみ有り候ても病み申さず候由。

鯔ヶ沢金木二（親類）孫、此方の外孫英次郎（池田忠助の子）なども植え候処、右の通りの由、是は角仙町小嶋老（藩医小嶋元袋）植之候よし。

○安政四年（一八五七）三月六日

金木（親類）にて良七二男並熊七悴豹七二才頃日植え痘瘡致し候よし。茂森唐牛昌三（藩医）の跡の医者（唐牛昌運のことか）植之候よし。両腕へ九ツ植え候処、三ツ出候よし。痘瘡の通り七五三繩張り居候よし。金木永（親類）にても悴熊三郎七才植え候よし。尤十三植え候処、九ツ出候よし。

○安政四年（一八五七）四月十日

一昨日兵司方にて孫兩人、茂森唐牛昌三老の弟医者衆（正しくは昌三の次男で、昌運の弟、唐牛昌孝のことであろう）へ頼み種痘致し来り候よし。（ここに唐牛昌孝の牛痘種法の一枚刷の文言入る）

右の通り半紙一枚摺の判書一枚ツツ呉れ候由、兵司持参し、爰に写し取る。此節大分流行引きならず、種え候者有り候よし。

○安政四年（一八五七）四月十五日

今日兵司方にて種痘医唐牛昌三の兄惣髮昌玄と申す人迎え差遣し取寄せ候由。昌三老は隠居致し跡矢張表医者^の由。
□(不明) ツ種候処、五つツツ出痘に相成候由。

○安政四年(一八五七) 閏五月二十八日

なを(又三郎の長男富三郎の子) 植痘瘡致し候に、五所川原(西津輕郡五所川原市) おかさま(富三郎の妻フサ) 召連れ行く。茂森唐牛昌雲老(藩医)へ行く。種笹森丁八木橋様の御子様能き植痘瘡に付き、右御屋敷へ唐牛召連れ参り植候よし。尤腕へ五ツツ十を植え候よし。孩兒なれば尚宜く候よし。

○安政四年(一八五七) 六月五日

なを(又三郎孫) 植痘瘡見てもろふに唐牛へ迎え差し遣し。駕籠にて来たり。御目に懸け候処、到て宜しき痘瘡の由。右より水を取り外小兒へ移し植え候由。田屋にも植残り一人有り申遣し候所、引風の由延引す。さつと三種にて酒上る。御酒上らず候由。寒晒もち差上る。四ツ頃御出、昼前御帰りに成られ候。唐牛昌(藩医唐牛昌三)老隠居致し兄様也。昌雲と申し候由。やがて四十近き御人也。十を植え候処、六つ出、流行痘瘡之通、水うみ、白うみかかり、豆きびのよう^に能痘瘡也。扱々奇妙なことも也。

四、本日記から見た牛痘種痘に対する弘前藩と民間人の態度

嘉永六年(一八五三)二月十一日の記事は極めて重要である。まず「近年痘瘡前度の様に無之、五六年以前より不引切流行申候」と「前度は六七年間を取り、乃至は五六年間を取り流行」の二つの条文は、嘉永六年以前には五六年ないし六七年毎に痘瘡が流行したのであるが、最近に至つて毎年のように流行したことを伝えるものである。他領からの人々の往来が頻繁になったことが一因であろう。著者が以前作製した「明治前津輕疫癘史年表」⁽¹³⁾にもこれらの流行は披見さ

れないものである。嘉永六年（一八五三）の時点で弘前と鰯ヶ沢そして又三郎の居住している賀田村でも痘瘡は流行していた。津軽全域の流行とまではいかなくても、諸所において散発的に流行していたことが理解される。

「木作」は「木造村」（西津軽郡木造町）のことで、前年の嘉永五年（一八五二）四月に秋田の医者板垣利斎がこの地に来て種痘を行ったことを述べたものと解釈される。

本日記には、日記の日付嘉永六年（一八五三）二月から見て「一作年」つまり嘉永四年（一八五一）に木造地方で痘瘡の流行があったことを「一昨年痘瘡あらしき方に有之候。」として伝えている。そして木造で種痘が行われた事実を伝えているが、その時期と種痘した医師を特定していない。勿論種痘の施行は個人的に数人を対象としたものではなく、三十数人という集団を対象としたものであった。この種痘実施は津軽における最初の種痘施行であり、実施者が秋田医者板垣利斎であったことは、藩の記録「御用格」に次のように記述されている。

御用格 嘉永五年四月十四日（読点 著者⁽¹⁾)

一、三奉行申出候、北岡太淳より之申出番付被成御渡吟味之処、秋田医者板垣利斎義元来種痘案内ニ付、此頃木造辺ニ而三十人余種痘仕候処、何れも順痘ニ出来追々望人茂御座候ニ付今暫逗留仕度旨願出可否私共ニ而志かと試申渡奉存候間、願出之通今暫逗留被仰付度旨、別ニ差障之節も無之候間、太淳申出之趣御聞届被仰付候様、試之上可否早速申出候様と茂被仰付候様沙汰之通

右の記録は秋田の医師板垣利斎が木造村で三十人に種痘を行っていざれも成功し、種痘を希望する者が続出したので、滞在の延長願いを藩当局に申し出たものであり、藩は藩医の重鎮北岡太淳に調査を命じ、太淳は格別の支障はないと、滞在延長の許可に同意している重要な史料である。

藩の公式録である弘前藩日記の嘉永五年（一八五二）四月の部が欠本となっているため、津軽の種痘史にとって最も重

要な右の事項を従来の研究者は発見出来なかつた。著者は欠本を補うため弘前藩日記の抄録ともいふべき「御用格」を調査して右の記事を見出し、板垣による種痘が津軽における牛痘種痘の嚆矢であることを実証した。

嘉永五年（一八五二）四月当時、江戸からは所謂南方系の種痘法が秋田や津軽に未だ伝えられていない時期であつた。したがつて板垣の方法は中川五郎治の弟子白鳥雄蔵がすでに伝えていた秋田県の仙北郡や久保田城下（現在の秋田市）で伝えた北方系の種痘法の可能性が極めて高い。板垣についての詳細は今でも知られていないが、この「金木屋又三郎日記」には板垣の名前と種痘実施時期は特定されていないものの、嘉永六年（一八五三）二月以前に明らかに秋田から医師が来て種痘を行ったことを示しており、この条文は「御用格」の記事を補うもので重要である。続く次の条文「右致候者も有之候よし」は、板垣が木造以外の地域においても種痘を行ったことを示唆しているが、詳細は不明である。

つまりすでに他地方で採用施行されている牛痘種痘法に関しては、弘前藩は消極的態度を取つた。弘前藩が北辺に位置しており、江戸からの遠隔の地であることが、情報の到達の遅れや誤解を招き、結果的に牛痘種痘の普及が遅れたとこれまでは一般的に考えられて来たのであつたが、又三郎日記の嘉永六年（一八五三）の記述によつて、右以外の理由として、医者技術の未熟さを指摘しているのは注目すべきで、本日記の後年の条にも披見されるところである。

左に掲げる弘前藩日記の嘉永六年（一八五三）二月二九日の条にも見られるように、弘前藩としては江戸藩邸に依頼して他地方の種痘状況をも調査した。これによれば種痘は「御仁政之第一之義」であることは十分に理解しているのであるが、国許では藩として最初の試みであり、その上種痘の副作用によつて生命の危険を招くこともあり、そうなるのは人々の間に不穏な空気をかもし出すことになるので、藩としては積極的に牛痘種痘の普及に努力はしないという結論であつた。尤も多人数の死者が出た記録は皆無である。

弘前藩日記嘉永六年二月二九日

種痘之儀江戸表ニ而御目付江御穿鑿被仰付候処、別紙坂巻並衛より松平越前守榊家来江之御触面ならび堀田相模守御振合共申出之趣ニ御座候得者、種痘之儀ハ御仁政第一之儀ニ付、御国表ニ而も私共者勿論向、支配頭ニ而厚差含前般御世話無御座候而者被行間敷候旨申出書付被成御渡与得評儀仕候処、諸人為方ニ可相成義も可有御座候得共、御国表ニ而ハ初発ノ義ニ付、諸人危み罷有候儀ニ付、如何様被仰付候而も相服申間敷、其上万一難症之小兒等有之候而者、却而不穩候様奉存候間、御世話構敷義者難申上奉存候。

右の記録によつて弘前藩で牛痘種痘の普及が遅れた一原因は施術者の技術の未熟さにもあつたことを一般の人々も認識したことは指摘出来ると思われる。なお弘前藩日記によつても板垣利斎による種痘のその後の詳細については不明であり、新史料の出現を期待したい。

又三郎日記の嘉永六年（一八五三）三月二十三日の記事は、弘前で痘瘡流行が目立ち始め、茂森町の藩医唐牛昌運（文献によつて昌雲とも記す）が種痘を行つたことを伝えている。昌三の「跡」とは昌三の息、昌運や昌孝（文献によつては昌考）のことである。五月五日の記事は昌三の次男昌孝の腕前が悪いとの評判を伝えている。これより前の二月十一日の記事、医師の未熟な腕前では覚束ないとあるが、昌孝のことを示唆するのもかも知れない。当時津軽において種痘普及に尽力していたのは唐牛兄弟しかいなかったからである。後に種痘普及に大きな足跡を示すことになる蘭医佐々木元俊¹⁶は未だ江戸に滞在中で、弘前にはいなかった。

同年五月六日の記事は又三郎の分家の子供達が軽い痘瘡で済んだことを伝え、弘前における痘瘡の小流行を実証している。

安政元年（一八五四）六月七日、安政二年（一八五五）十二月二十一日、安政三年（一八五六）正月二十一日、二月十一日などの記事は、痘瘡の流行が頻繁であり、少なくとも五、七、九年毎に流行した以前とは異なつて痘瘡が連年止むことが

なかつたことを実証している。

安政四年（一八五七）二月十九日の記事は、江戸から改めて痘漿を取り寄せたことを伝えているが、これによつて唐牛兄弟たちが弘前藩当局に懇願して江戸から嘉永五年（一八五二）十一月末日に取り寄せた痘苗は余り良質なものではなかつたことかあるいは種切れになつたことが示唆されるが、これまで知られた文献によつては、詳細は不明である。

安政四年（一八五七）四月十五日の記事中、唐牛昌三の兄で昌玄と称する人物が披見される。経歴については不明であり、どの程度に種痘に関与しているかも不明である。實際何ヶ所に種痘したかは原日記中の字が読めないので分からないが、出痘したのはその中五顆であり、それ以上植えたことは確かである。

同年（一八五七）六月五日の条文を読むと、唐牛昌雲が又三郎の孫の発痘状況を見るため往診し、痘から痘漿を撰取して、他の小児へ植えたことが分かる。その後の文に、十個所に種痘し、六顆出痘したことが記されているが、出痘を確実にするため、ある程度多目に種痘したものと考えられるが、正確なことは又三郎日記のみによつては知られない。

四、おわりに

津軽地方における牛痘種痘の実施は嘉永五年（一八五二）にまで遡ることが出来るが、それは他地方から来た医師によるものであつた。それに刺激された弘前藩医による種痘施行は他地方における実施に比較して決して大幅に遅れていた訳ではなかつたが、弘前藩が種痘による副作用の発生を恐れて積極的態度を取らなかつた。このため弘前藩医たちが個人的に種痘普及に尽力しなければならず、結果的に彼らの技師の未熟さが普及の遅延を招いたものと思われる。金木屋又三郎の日記は右の事情を物語るものであり、津軽の種痘史の一面を示す史料であると同時に、幕末における痘瘡などの疫病流行の実態を示す大変貴重な史料であり、本日記によつて津軽における痘瘡流行の歴史がより詳細に判明した。

本稿を筆するに際して、本日記を解読され、筆者にその使用を許可された弘前古文書解読会会長花田要一氏に深謝の意を表する。

文献

- (1) 松木明知「津軽地方に於ける種痘の起源」『津軽医史』創刊号、一頁、一九六三(昭和三十八年)
- (2) 松木明、松木明知「津軽の医史」二七頁、津軽書房、弘前、一九七二(昭和四十六年)
- (3) 松木明知「種痘と津軽」『医学選粹』十号、十五〜十八頁、一九七七(昭和五十二年)
- (4) 松木明知「東北地方の種痘史」『医学選粹』二三号、十六頁〜十七頁、一九八〇(昭和五十五年)
- (5) 松木明、松木明知「続津軽の医史」六五頁、津軽書房、弘前、一九七五(昭和五十年)
- (6) 松木明知「種痘法の移入と弘前藩の態度」『日本医史学雑誌』十六巻三号、四四〜五十頁、一九七〇(昭和四十五年)
- (7) 吉村和夫「金木屋物語」九五頁、北の街社、青森、一九八六(昭和六十一年)
- (8) 斎藤昭一編『山一金木屋又三郎日記抜粹編』株式会社青研、青森県中津軽郡五代、一九九五(平成七年)
- (9) 小鹿島果編『日本災異志』五六七頁、地人書院、東京、一九六七(昭和四十二年)
- (10) 立川昭二『日本人の病歴』(中公新書)、一四三頁、中央公論社、東京、一九七六(昭和五十一年)
- (11) 松木明、松木明知「津軽の文化誌」一六九頁、津軽書房、弘前、一九八三(昭和五十八年)
- (12) 永宝日記、萬覚集、二二二頁、みちのく双書 第三十五集 青森県文化財保護協会、青森、一九八二(昭和五十七年)
- (13) 松木明、松木明知「続津軽の医史」六八頁、津軽書房、弘前、一九七五(昭和五十年)
- (14) 松木明知、花田要一編「津軽医事文化史料集成」二四二頁、岩波ブックサーピスセンター、東京、一九八六(昭和六十一年)
- (15) 橋本博編『改訂増補大武鑑』名著刊行会、東京、一九六五(昭和四十年)、中巻、九一二頁」によれば嘉永七年の武鑑には、堀田備中守、堀田摂津守、堀田豊前守は披見されるが、堀田相模守は見えない。改めて検討する必要がある。
- (16) 弘前市史編纂委員会編 弘前市史 五二〇頁、弘前市、弘前、一九六三(昭和三十八年) 元俊は文久元年(一八六一)十一月に弘前に帰ったとあるが、著者の調査によって、元俊はすでに同年九月二十七日に弘前に到着していることが明らかとなった。

前掲文献 二の九〇頁を参照

(弘前大学医学部麻酔科)

Prevalence of Variola Epidemics and Practice of Jennerian Vaccination in the Hirosaki Feudal Clan in the Last Period of the Edo era.

—A Study of Matasaburo Kanagiya's Diary—

by Akitomo MATSUKI

The history of variola epidemics and Jennerian vaccination in the Tsugaru district has been studied by the author for the past thirty years and the study was mainly based on the formal documents of the Hirosaki feudal clan. However, details of prevalence of the epidemics and actual circumstances of the practice of the vaccination remained unclear, because he could not use any private documents written by inhabitants of this area. (8)

Recently a private diary of twenty volumes by Matasaburo Kanagiya (1801-1866) was donated to the Hirosaki City Library. He was a rich merchant of the area and was eager to describe in his diary details of even trifling episodes which happened to him and his relatives, as well as some events which occurred in the area.

According to the diary, it is clear that variola epidemics prevailed every one or two years during the period and that one of the reasons why the Hirosaki feudal clan was very passive to accept and promote Jennerian vaccination against the epidemics was inexperienced technique of vaccination of physicians who engaged in the practice.

As the diary was written by a merchant, it is an important historical material to elucidate the medical history of the Tsugaru district in the period of about 30 years from 1837 through 1864.